

児童健全育成賞（数納賞）佳 作

予防的観点から臨んだ3年間の取り組み —自分を大切にできる子どもに—

愛知県北名古屋市

鍛治ヶ一色児童館 児童厚生員 高 橋 由香里

1. はじめに

私の所属組織である鍛治ヶ一色児童館は、平成16年に指定管理を受け、N P Oならではのフットワークの軽さとネットワークの広さを活動につなげ、子どもたちが様々な体験を通して社会性を身に付けていけるようにと日々精力的に活動している。大切にしていることは、「ひとりひとりの子どもに寄り添う温かい支援。」である。児童クラブは併設されていないため自由来館児のみで、子どもの背景がわかりにくく中、性質の理解、困り事、強み、潜在能力の察知など丁寧に対応している。丁寧な対応と子どもをわかろうとする意識により、虐待をはじめ諸問題の早期発見・早期対応につながっている。

このような場合には、専門機関と連携を取り子どもにとって最善の方法を取っていく。緊急性がなく、児童館に遊びに来ることができる状況にある要保護児童については、必要な支援をしながら継続的に実践記録を取り定期的に報告する形をとっている。このように、要保護児童は専門機関をはじめ学校、地域の社会資源などあらゆる方向から見守られている。しかし、私たちが児童館で関わっている子どもたちの中には、専門機関に名前が挙がってこない様々な困り事を抱えた子どもが多数いる。

この子どもたちが、自分のことを大切に思えるような支援をしていきたい。この先、何があつ

ても自分のことが大好きで大切だから、乗り越えていける、生き抜いていける。そう思えるような成功体験や達成感を味わい、自己肯定感・自己有用感を高めていけるような取り組みをしていきたいという予防的観点から、「子どもがつくる夏まつり」がスタートしたのである。今回は、「子どもがつくる夏まつり」がスタートしてからの3年間の取り組みと、それによって変化した子どもと地域の方々の意識についての報告である。

2. 乗り越えたい課題

文部科学省が発表した調査結果によると、日本の子どもは諸外国の子どもに比べ、自己肯定感が低いという。来館する子どもたちは、「感情のコントロールがうまくできずに怒りになってしまふ。」「他の子どもの良いところを認めることができない。」「自分より優れている子どもには従い、自分より下だと感じている子どもには威張ったりいじめたりする。」など、自己肯定感が低い子どもの特徴的な部分をよく目ににする。子どもたちが、本来持ち合わせている強み、良さ、力を引き出すためにはどんな取り組みが有効なのかと話し合いを重ねた。

まずは、「自己肯定感・自己有用感は、成功体験や達成感を感じる体験が多いほど高められる。」と推測した上で、北名古屋市の「子ども・子育て支援事業計画」の施策の中にある「子ど

もの出番・居場所づくり」「子どもを地域で育てる意識づくり」に焦点をあて進めていくことにした。

以前から子どもたちには、「これを作りたいけど手伝ってくれないかな?」「これどこに飾つたらみんなが見やすいと思う?」など、児童館をみんなで築いていくことを意識した関わりをしてきた。このような日常を送っていく先に、大勢の子ども、保護者、地域の方々が関わり合う夏まつりが待ち構えていた。

3. 地域とのつながり

昨今、核家族化が進む中、学校や家庭だけでは十分に支援できない部分を、児童館が地域の拠点となり補完していくことが必要だと考えている。地域の方々が、児童健全育成に自主的に関わってもらうためにはどうすればよいかを考えたとき、児童館はどんな機能を果たしているかを含め児童館をよく知つてもらい、信頼してもらうことだというシンプルな答えになった。

地域の方々が来館し、子どもについての話し合いや行事に参加してもらうだけでは信頼関係は築けないと想い、少しでも貢献できればとこちらから積極的に出向いている。自治会ごとに開催される祭りや子ども会が実施する活動など精力的に参加している。また、児童館だよりを配布する際には自転車で出掛け、畑で働く地域の方や犬の散歩をする方などあらゆる人とコミュニケーションを取っている。小学校では、学校運営協議会の地域コーディネーターとして動き、ネットワークが広がっていった。時間をやり繰りして動くことは大変だが、この地域の力が子どもたちの成長にプラスになると思うと全く苦にはならなかった。

このように地域に出向くことで諸問題にも遭遇し、社会福祉士として相談援助をすることも増えていった。このようなやりとりの積み重ねで、確実に共助の関係を構築することができたのである。そして児童館が、児童健全育成を担う福祉施設として機能していくために必要不可欠である社会資源が、ひとつずつ増えていった

のである。

4. 児童館活性化ツール

1) 子ども会議シート

夏まつりは、例年、子ども実行委員を募り進めていたが、それは手伝いの域を超えない内容だった。そこで、今までの取り組みを止め、企画・準備・運営まで全てを子ども主体で進め、活動の中で多くの経験をしてほしいと考えた。各々の力を得意な分野で発揮し自分たちで作り上げた夏まつりによって、充実感・達成感を感じ取り、自己肯定感・自己有用感を高められるように地域の方々とともに支援していこうと考えた。

ここで、子どもたちが取り組みやすいようにと使用した「子ども会議シート」について説明する。「こども会議シート」には、目的、話し合った内容、準備物、話し合った仲間を書く欄がある。

子どもが、コーナーごとの話し合いを記録することで、自分の考えを伝えることや交渉すること、歩み寄ることなどが身に付き、自分たちの考えに責任が持てるであろうと思い使用した。子ども会議をするにあたってのルールは、「相手の意見を否定しない。」「他の人が話しているときは、最後まで静かに聞く。」のふたつを掲げた。

2) 通貨「カジー」

カジーは、8年前から流通させている鍛治ケ一色児童館だけで使える通貨で、1年中流通しており子どもたちだけでなく保護者にも浸透している。夏まつりをはじめ大きな行事での流通や毎月7の付く日に実施する「カジーチャンスすごろく」で手に入れることができる。ほかには、クイズのくじ引き、手作り品との交換、パソコンクラブの延長など、様々な活動に絡ませている。また、年に3回「ジャンボ宝カジー」という抽選会が行われ、何十枚というまとまったカジーがもらえる。この「ジャンボ宝カジー」も、まとまって手に入ったらみんなが喜ぶと思った子どもの考案である。

5. 「子どもがつくる夏まつり ～はじまり～」

子ども実行委員は、児童館だよりで募り35名の子どもが手を挙げ、グループごとに各コーナーの内容を決定してスタートした。私たちは、目標に向かって支援するとともに、様々な事項を自己決定できるようにすること、各々の強みを前面に出していくようにすることに配慮した。また、できる限り介入しないようにと、口も手も出さない我慢の日々を過ごした。

1年目は、6グループの子どもたちが子ども会議を進めながら話し合いを行った。リーダー性の強い子どもがいるグループは、初回の会議からスムーズにことが運び、職員が全く介入しなくても順調に進んでいった。リーダー性を持つ子どもが複数いるグループは、会議の段階で何度もぶつかっていたが、お互いに歩み寄りながら進んでいった。その中で、地域の方も、保護者も、職員も、当日が終わるまで目が離せなかったA君の夏まつりを振り返ってみた。

6. A君の夏

1) 1年目～A君に寄り添う～

高学年のA君は、普段から自分の世界に入ってしまう子どもで、コミュニケーション能力が高い方ではなく、来館しても一人で本を読んでいることが多かった。1年生の時から、うまく人と関わることができないので、トラブルになることや誤解されることもあった。このA君が、「児童館だよりに書いてあった夏まつりのお店出すっていうやつ、僕やりたいです。」と申し出てくれたのだ。私たちは、A君が自分からやってみようという気持ちになったことがとても嬉しく、最後までしっかり支援し自信につなげていきたいと思い、A君の夏まつりが始まった。

A君は、一人でコーナーをしたいと言っていた。一人で400人に対応するのは難しいと感じたので、メンバーを集めるという意見を出してみたが、一人で実施するというのは譲れないと感じた。無理に人数を増やすことでA君のや

る気が失せるのは好ましくなかったので、申し出を受け入れることにした。子ども会議は、メンバーがいないので職員が入って進めていった。1回目の会議では、的あてゲームをしたいこと、トイレットペーパーの芯を立てて的にし、同じく芯を投げて倒すと言い材料を持ってきていた。実際にトイレットペーパーを立ててみると倒れやすいことがわかつたし、「大人数の中で芯を投げるはどうかな？」と問いかけると、しばらく20分ほど戻ってこなかつた。聞き方が良くなかったかと考えながら待っていると、「わかりました。確かに倒れやすかつたし危ないと思うので、別のことを考えてきます。」と言ってきた。一緒に考えようと誘つたが、一人で考えたいからと帰ってしまった。次の来館は、2週間後だった。

A君は、約束通り代替案を考えていた。それは、ペットボトルを使っての輪投げだった。しかし、それは単純な輪投げではなかつた。

①各ペットボトルには、ビニールテープで5本線を引く。

②輪を一人2回投げる。

③輪が入ったペットボトルの線を合計する。

④その合計点数と同じ番号のクイズを出す。

⑤それが正解ならカジー（児童館内の通貨）がもらえる。

という、複雑なものだった。さらにクイズは難しく、本番で参加者から文句が出ると予測された。しかし、2週間かけて考えてきた案なので、大枠は残し細かいところで折り合いをつけていくことにした。提案したのは、「クイズが難しいのでもう少し簡単にすること」「幼児は輪投げだけにすること」の2つである。幼児の件はすぐに納得したが、クイズについては、この問題は残したいので低学年用に簡単な問題を作つてることで決定した。当日の見通しをつけさせたくて流れの説明をしたが、あまり興味がないようだった。

2) A君の母親に寄り添う

ある日、母親からしっかりとできているか心配だと電話が入つた。普段から、A君の言動につ

いて心配され神経質になっていたので、その不安を解消するためすぐに話す機会を設けた。母親は、夏まつりのことを話すA君は生き生きとしていて楽しみな反面、一人で乗り切れるかが心配だと話された。今回、A君の申し出がとても嬉しかったこと、やり抜くことで自信につなげていきたいと思っていることなど、私たちの思いを伝え経過を話した。

最初の子ども会議からここまで、アイデアを考え直してもらったり修正したりと、私たちの意向もくみ取りながら、折り合いをつけることができている。A君からマイナスな感情や態度が見受けられないので、心配はいらないと伝えた。当日は、気長に優しく話し掛けてくださる民生委員さんに付いてもらうこと、他の地域の方や私たちも付いているので、決して一人ではないことを伝え、母親の不安を軽減した。

3) いよいよ本番

民生委員さんはじめ手伝いに入ってくださる地域の方には、「子どもがつくる夏まつり」開催にいたった課題、現状、そして何を目標にしているのかを、援助計画を基に丁寧に説明した。理解していただいた上で、どのような援助をしてほしいかを具体的に説明した。それは、「出来る限り子どもに任せてほしい。」「何か問題が起きたときどうするかの決定は、無理のない範囲で子どもに決めさせてほしい。」「本番が終わったときには、ここが良かったと具体的にほめてほしい。」とお願いし本番を迎えた。

本番当日、A君には「たくさんの人が来るけれど慌てなくていいこと。」「何か困ったことが起きたら、手伝いの地域の方に伝えること。」「最後まで頑張ること。」の3つを伝えた。いつものように、真剣に聞いていなかったが、地域の方が代わりに大きくうなづいてくれていたので、この人たちとならやり抜けると安心したのである。

活動中は、想像通り純粋な輪投げではないことやクイズが難しいことに、参加者が文句を言い始めた。するとA君は、「じゃあ、しなくていいから。」と言ってしまいさらに反感を買つ

てしまった。民生委員さんが、「A君は、ずっとみんなのために一人で準備してきたんだよ。難しかったら助けるから遊んでみよう。」と、諭してくださいましたおかげで大きなトラブルにはならなかった。A君は、みんなが怒っていても気にていなかつたし、治めてくださった方に感謝することもなかった。

ちょうどその場面を見ていた母親は、A君に声を掛けようとしたので制止した。A君はおそらく、みんなにそう言わるのは予想していたこと、参加者の発言も好ましくないこと、A君が動揺しないで落ち着いていることを説明し、「A君は大丈夫だから最後まで見守りましょう。」と伝えた。

A君は、混み合っていても自分のリズムで動いていたので、イメージ的には淡々とこなすという感じだった。ただ、そのイメージが物語るように、楽しんでいるのかどうかは表出していなかつたので、振り返りのときに引き出していくべきと考えていた。

4) それぞれの振り返り

A君は、「厳しくすることにこだわり難くなってしまったが、みんなに言われたので今度はもう少し簡単にしたい。」「いつも関わり合わないような子どもや地域の人と関わり合えたことが良かった。」と語った。今まで、人との関わりを避けていたので、人と関わり合うことが良かったと思えた経験は、今後のA君にとって変化するきっかけになるのではと思った。

A君の母親は、手を離さずにやり遂げさせてくれたことと児童館が居場所になっていることへの感謝の言葉を泣きながら伝えてくださいました。こちらがどれだけ支援しても本人の気持ち次第なので、A君のコーナーの仕組み作りややり直しに折れない心は、元々備わっているもの、まだまだ、パワーが眠っていると思うと伝えた。A君の夏まつりは、母親も前向きになれる体験だったと思う。

地域の方は、「最初に説明を受けたときは、複雑な仕組みに戸惑ったが、A君が手伝いの人一生懸命に説明をする姿を見て、成功させて

あげたいと思った。」「コミュニケーションを取ることが苦手だと聞いていたので、説明したり参加者と相対することは、僕たちには考えられないような緊張感があったんじゃないかな。」と話された。

私たちは、子どもの考え方を形にしていくことにこだわり過ぎたのではないか、もう少し妥協点を示すことができたのではないかと考えた。クイズの出し方や難易度などの話し合いに時間を取ればよかったですと振り返った。また、地域の方には事前に「子どもがつくる夏まつり」にいたった経緯を丁寧に説明したつもりだったが、当日は温度差を感じることがあった。子どもを優先してくださる方がほとんどだったが、中には子どもの意向を聞かずに順序を変えてしまったり、行列ができて人がはけていかないとお声も頂戴した。多少の温度差は覚悟していたが、そこを埋められなかつたのは、子どもの思いをうまく代弁できなかつた私たちの課題となつた。

5) 夏まつり後のA君とまわりの子どもたちの変化

A君は、やり遂げた達成感と充実感で以前よりも明るく前向きな発言が多くなっていった。その後、クリスマス会でも実行委員に手を挙げ、手品をしたいと道具を持って来館し披露してくれた。今回、来館する時間もなかなか取れず、家の練習が中心となり本番を迎えた。家の様子は、A君には内緒で母親が報告してくれていた。

失敗したものや時間が掛かってしまうことがあったが、夏まつりと違って見ている子どもたちに変化があった。ほとんどの子どもが文句も言わず、「もう一度試してみれば。」と声を掛け温かく見守ってくれていたのだ。夏まつりもクリスマス会も自分で手を挙げ、考え、遊びを提供してくれるA君の姿を見て、応援してあげようという気持ちに変わっていたのである。A君も周りの子どもたちも大きく成長した1年目を経て、2年目の夏まつりを迎えた。

7. 「子どもがつくる夏まつり～めばえ～」

1) A君、2度目の夏まつり

8月開催の夏まつりにもかかわらず、4月中旬「今年の夏まつりは、射的っぽいコーナーをしたいと思っているのでよろしくお願ひします。もちろん一人です。心配なら昨年のあの地域の人を付けてください。」と伝えてきた。A君は、民生委員さんのことが気に入り、あの人と一緒になら安心してできると思ったのだろう。信頼できる人が増えることは支えになると思い逆指名を受けることにした。

内容については、「夏だから、水鉄砲を使って外でして、雨だったら割りばし鉄砲を使おうと思うのですが、どうでしょう？」という案だった。「まだ、4月なのに考えててくれてありがとうございます。夏だから水鉄砲っていう考えはすごくいいと思うよ。じゃあ、晴れと雨、両方の準備進めようか？」と答えると「あっ、少し待ってください。」と言い考え込んでいた。そして、A君が出した答えは「やっぱり割りばし鉄砲にしようと思います。両方準備するとしたら水鉄砲をいくつも買わなきゃいけないし、割りばし鉄砲もいくつも作らなきゃいけない。的も、水と輪ゴムでは変えなきゃいけないかも知れない。だから、晴れでも雨でもできる割りばしの方がいいと思いました。」であった。このように、1年目には自分の思いが前面に出てしまっていたA君が、材料費や手間に關しても考えられるように成長していた。

的については、厚紙で作り半分に折って立てる。動物や星、花など絵を付け、点数を表示する。点数と同じカジーがもらえることにした。「的は、ささっと出来るから大丈夫です。」という発言があったので「でも、みんなが遊ぶものだから。」と言うと、少し考えて「丁寧に作らなければいけないですね。」とこちらの意図に気付いてくれた。

1年目に比べA君は、自分のことだけではなく、周りのことも考えられるようになっていた。

一つ一つを考えることに時間は掛かるが、以前のような自己中心的な考えはしないようになっていた。

2) 地域の方へ渾身の説明

1年目の課題に挙がっていた、地域の方の温度差ができる限り少なくするため、夏まつりの趣旨説明とお願いをした。

「私たちは、子どもたちが自己肯定感・自己有用感を高め、自分は価値ある人間だと思いながら成長していくってほしいと強く願っています。これを叶える一つの方法として、夏まつりの企画から運営までを子どもたちに任せる形をとつて2年目になります。今日、この日を迎るために、何度も何度も話し合いを重ね、前進したと思ったらやり直しになつたりと、山あり谷ありでした。子どもたちにとって険しい道のりを、途中で投げ出さずに今日を迎えたこと自体、とても素晴らしいです。子どもたちが誇らしいです。何枚もの壁を乗り越えてきた子どもたちですから、今日も最後まで頑張れます。みなさん、普段から子どもたちのことをよく見てくださっているので、色々なことが気になってしまいますが、各コーナー、机の配置、物の配置、人の配置全てに、子どもたちなりの理由があり今日この形になっています。どうか、任せてやってください。どうしても改善が必要だと思うようなことがあれば、どうするかを子どもたちに決めさせてください。以上のことをくみ取っていただき、お支えいただきますようよろしくお願いします。」

3) A君 2度目の夏まつり

2年目は、シンプルな的でゲームだったことで、全てが順調に流れていった。A君が声を荒げることも、参加者が文句を言うことも昨年に比べたら雲泥の差だった。民生委員さんはじめ地域の方も、縁の下から支えてくださっているという印象を受け、昨年より一歩前進したと実感した。

A君の1年目の振り返りで出た「簡単なものにすれば良かった。」という反省が、しっかりと反映されていたことで、スムーズに人の波が流

れていた。そして、時間に余裕があったことで、手伝いの方や参加した子どもたちとの関わり合いが増え、A君は満足そうだった。

後日、A君が夏まつりの途中で「おばけやしきに行きたいから10分ぐらいみなさんでしておいてください。昨年は、忙しくて行けなかつたんで。」と言い残し行ってしまったので、その間大人だけでやつたと民生委員さんが笑いながら話してくださいました。

4) A君の自己肯定感・自己有用感

二度の夏まつりや、その間に実施した行事への積極的な関わりの中で、少しづつ自信がついていったようだ。その都度、繰り返される子ども会議でのやり取りでは、自分の考えを明確に伝えられるようになり、責任感がでてきた。以前は、笑顔も少なく私たちが話しかけても気が向かなければこちらを見向きもしない状態だった。しかし、何度も達成感を味わうことで、顔が上向きになり笑顔も増え、視線を合わせて話ができるようになってきた。また、少しづつだが、周りの人がどう思うか、どうしたら楽しめるかなど自分以外にも目を向けることができるようになっていった。

8. 地域の方々の意識変化

子ども主体で夏まつりを進めていくことになった理由、子どもや児童館の課題、地域の方々にはどう子どもを支援してほしいかなど、事前に説明している。「これを全うしようとすると、とても神経を使う。大人主体で動いた方が、どんなに楽だろうか。」と、実施前にも実施後にも出た感想である。その度に私たちは、子どもたちには、自分を好きになり自分を大切にする大人になってほしいと伝えてきた。

このやり取りを繰り返しながら行事を重ね「子ども主体」を理解してもらい、一人一人の子どもをわかろうとしながら関わっていただいたことで、表面的ではない深い絆が生まれていった。これによって、児童館内での子どもとの関わりだけではなく、地域の中に出ても子どもとの関わりを持っていこうとする様子が伺えた。

児童館に持ち込まれる子どもの様子や情報も、会議だけにとどまらず、日常的に寄せられるようになつた。先に示した支援事業計画の施策「子どもを地域で育てる意識づくり」という項目に向けて、大きな前進を遂げたのである。

行事自体においても「こうした方が子どもの力が引き立つ。」といくつもの意見をいただく。例えば、「おばけやしきは部屋が薄暗いので、子どもたちが一生懸命描いた絵がよく見えない。発光塗料で描いてみたらどうか。」と安全な発光塗料を見つけ、筆と一緒に持ち込んでくれた。地域の方々が「子ども主体」を主眼に動いてくれつつ、子どもの最善の状態を一緒に作っていこうとする気持ちに感動を覚え、感謝を伝えた。

このように、地域の方々全体が変化していく中、もう一人変化し続けている方がいる。彼とは、N P Oの活動の中で知り合つた。仕事の傍ら、休日には福祉施設を訪問していると聞いたので、内にある思いに興味を持つた。なぜなら、彼はどちらかというと人との関わりが苦手なようで、よく視線を外されることがあった。また、話の端々に自分は自慢できるところがないからと言い、自己肯定感の低さを感じ取っていたからだ。ボランティア活動を始めたきっかけは、「自分でも誰かの役に立てるのかと思い始めました。」という答えだった。

そこで、児童館の行事に誘つてみたのである。最初は見学していた彼だったが、手伝いをしたいと言い一生懸命動いてくれている。「みんなのありがとうがすごく嬉しいです。また、来てもいいですか？」と言つた彼の目はしっかりと私を見ていたのである。

9. 「子どもがつくる夏まつり ～kaji 3～」

1年目、2年目で上級生が生き生きと動いている様子を見ていた子どもたちが、夏まつりを盛り上げたいと集つた。2年間、実行委員として携わっていた子どももいたので、今までの経験から感じたことを話してもらった。「準備の時にふざける子がいると、物が壊れたりケン

カになつてしまつるので、実行委員になる時にしっかりできると誓つてもらう。」「この人はいいけどこの人はダメなど差別は絶対にしない。」「お客様に優しくする。」などの意見が出た。参加者が楽しむためにはどうすればよいかが、経験を積むことで明確になっていった。

3年目の夏まつりの感想を地域の方々に聞くと、「子どもが生き生きしていると地域も元気になり、相乗効果が生まれる。子どもたちのためにもっと力になりたい。」とおっしゃっていた。

10. さいごに

先に述べたように、今回は「子ども・子育て支援事業計画」に掲げている「子どもの出番・居場所づくり」「子どもを地域で育てる意識づくり」に焦点をあて、子どもが力を発揮でき大勢の地域の方が関わる夏まつりでの実践を記録した。この実践記録によって明確になつたことは、子どもの自己肯定感や自己有用感を高めていきたいと思う職員をはじめ子どもを取り巻く大人の意識が、一つ一つの支援に意味を持たせ、これが成果につながつていったということである。

この3年間、子どもが意見を表出しやすいように、日常的に子ども会議を取り入れ、話し合う機会を増やしてきた。そういった経験の積み重ねで、自分の考えを言葉にして伝えることができ、それが形になることや実践につながれば子どもたちの自信になる。自分に自信が持てれば、自己肯定感や自己有用感が高められる。その高められた先には、自分のことを認め好きになり、大切にしていける子どもたちの姿が見られるであろう。決して上手く行くことばかりではないが、誰かが、どこかが、こういった支援を継続的に丁寧にしていかなければ、子どもは、自分を大切に思いながら成長することができないと強く思う。児童館は、子どもの個性に合わせた支援方法の基、深く関わつていける施設である。そして職員が、ソーシャルワーク的な視点を持ち、早期発見・早期対応に加え、予防的

な観点からアプローチしていくこともできる。

今後も、様々な家族形態や諸問題を抱える子ども自身を積極的に支援するとともに、その家族や子どもが関わる地域を含めアプローチしていく必要があると考えている。地域のネットワークを構築するだけではなく、それを手段として児童館は何を達成していけるのかを考えながら、また新たな実践を積み重ねていきたい。